

## 丸山真男「思想のあり方について」『日本の思想』（岩波新書）所収

### ササラ型とタコツボ型

その問題を考えていきますために、ちょっと話をかえまして、日本の社会なり文化なりの一つの型というものを非常に図式化して表現してみたいと思います。私はかりに社会と文化の型を二つにわけて考えることとします。一つは妙な言葉ではありますが、ササラ型といいにこれに対するもう一つの型をタコツボ型とかりに呼んでおきます。ササラというのは、御承知のように、竹の先を細かくいくつにも割ったものです。手のひらでいえばこういうふうに元のところが共通していて、そこから指が分れて出ている、そういう型の文化をササラ型というわけであります。タコツボってというのは文字通りそれぞれ孤立したタコツボが並列している型であります。近代日本の学問とか文化とか、あるいはいろいろな社会の組織形態というものがササラ型でなくてタコツボ型であるということが、さきほど言ったイメージの巨大な役割ということと関係してくるんじゃないかと思うわけです。

(後略)

### 近代的組織体のタコツボ化

しかもこのようにインテリがインテリジェンスという共通の基盤の上に立たず、したがってインテリという等質的な機能で結ばれた層が本来存在しないということは、文学、社会科学、自然科学それぞれのあり方にかかわってくるだけでなく、文学者、社会学者、自然科学者それぞれがいわば一定の仲間集団を形成し、それぞれの仲間集団が一つ一つタコツボになっている、こういう事態としても現われています。近代市民社会が発達するに従って機能集団が多元的に分化してくる、ということ自体は、これは世界的な傾向であります。それは先ほど言った学問や組織の過度の専門化の問題、あまりに個別的に分化し、あまりに専門化してくるという問題から出てくる弊害が、アメリカやヨーロッパでもいろいろいわれているのと同じことであります。

ただ日本の特殊性はどこにあるかというと、ヨーロッパですとこういう機能集団の多元的な分化が起っても、他方においてはそれと別のダイメンジョン、それと別の次元で人間をつなぐ伝統的な集団や組織というものがございます。たとえば教会、あるいはクラブとかサロンとかいったものが伝統的に大きな力をもっていて、これが異った職能に従事する人々を横断的に結びつけ、その間のコミュニケーションの通路になっているわけです。ところが日本では教会あるいはサロンといったような役割をするものが乏しく、したがって民間の自主的なコミュニケーションのルートがはなはだ貧しい。明治以後、近代化が進むに

つれて、封建時代の伝統的なギルド、講、寄合といったものに代って、近代的な機能集団が発達しますが、そういう組織体は会社であれ、官庁であれ、教育機関であれ、産業組合であれ、程度の差はありますが、それぞれ一個の閉鎖的なタコツボになってしまう傾向がある。巨大な組織体が昔の藩のように割拠するということになるわけであります。東京にも京都にもそのほか大都市には総合大学というものがあります。文科系、理科系のいろいろな学部をもっている大学を総合大学といますが、総合という言葉は実に皮肉でありまして、実質はちっとも総合ではない。法科とか経済とか、いろいろな学部があつて、それが地理的に一つの地域に集中している、各学科の教室や研究室が地理的に近接しているというのを総合大学というにすぎない。そこで総合的な教養が与えられるわけでもなければ、各学部の共同研究が常時組織化されているわけでもない。ただ一つの経営体として、大学行政面で組織化されているというだけのことです。ユニヴァーシティという本来の意味からは甚だ遠いのが実状です。

### 組織における隠語の発生と偏見の沈澱

ところでこういうふうに各組織体がみんなタコツボ化しますと、その組織体は、それに属するメンバーというものを、まるごと飲み込んでしまうわけであります。メンバーをまるがかえにしてしまうから、従ってその相互の間に共通の言葉、共通の判断基準というのが自主的に、つまり下から形成されるチャンスはおのずから甚だ乏しくなる。政治や経済の組織だけでなく芸術の分野でも、文壇とか楽壇とか画壇とかいう「壇」、またはその中の何々サークルとか何々会とかいうものが不断にタコツボ化の傾向をもちますから、そこに属している仲間だけで通用する言葉なりイメージなりがおのずから発生するということになる。われわれの国におけるこういう組織なり集団なりのタコツボ化は、封建的とかまた家族主義というような言葉でいわれますけれども、単なる家族主義とか封建的とかいった、いわば前近代的なものが、純粹にそれ自体として発現しているというより、実は近代社会における組織的な機能分化が同時にタコツボ化として現われるという近代と前近代との逆説的な結合としてとらえなければいけないんじゃないか。

それはともかくとして、各集団がそのメンバーをまるがかえにする結果、いわば組織の内と外というものが、いわゆるインズ（内輪）とアウト（よそ）というものが峻別されることとなります。ところがタコツボ化というものは無限に細分化されるわけでありますから、従ってまた何が内であり、何が外であるかということもまた無限に細分化される。たとえば学界とジャーナリズムというものは、それぞれのタコツボになって対立している、なかなか相互に言葉が通じない。ところがジャーナリズムならジャーナリズムをとりますと、そこではまた大新聞、週刊誌、総合雑誌というようなジャンルにおいてやはりそれぞ

れのタコツボ化が見られる。中央の大新聞の中でまたそれぞれの新聞社が非常に閉鎖的な一種の団体精神（エスプリ・コール）のようなものを何となく持っている。明治大正時代には新聞記者が一つの社から他の社へ移るということがごく普通に行われた。新聞の組織が近代化し巨大化するほど、むしろまるがかえ的になって、社会的流動性が乏しくなってしまうのは、日本の「近代」の特質をよく物語っています。たとえばよく新聞記者諸氏が、うちじゃこういうふうにしてますっていう、そのうちじゃっていうのが非常に象徴的です。

こういうふうになりますと、会社であれ、大学であれ、組合であれ、当然うち同士だけで通用するいろんな価値基準なり、言葉というものが発生し、そこから集団内部の言葉の隠語化がおこってくるわけであります。その集団の内部だけで通用するものの考え方感じ方が発生し、しかもそれがだんだん沈澱してくるわけです。つまりアウトに対してインズ了解事項が集団の下層に沈澱してきますと、お互いの間同士ではそんなことは当然でいままさら議論の余地がないと思われることが、だんだん多くなっていく。take for granted という、つまり当りまえで、もう言わなくても分っていて、問題はそこから先にあるとして片づけられる部分が、集団意識の下層に沈澱して非常に厚くなっていくわけです。つまりそれぞれの組織的な集団が、こういうふうにして沈澱した思考様式というものをみんな持つようになる、そこに組織としての偏見がそれぞれ抜きがたく付着するということになるわけです。

### 被害者意識の氾濫

しかもこういうふうに個別的な集団がタコツボ化し、しかもわれわれのコミュニケーションの範囲がますます拡大する、つまり社会がだんだん大社会になっていくということになると、各自の属している集団相互のイメージのぶつかり合いがますます強く印象づけられる。しかも自分の属している集団というものは、社会が膨大化するに従って、実質的には大きな勢力をもつものも、その集団自身の眼には非常に小さなものとして受けとられてくる、そこでこういうふうなところでは、おのこのグループというものが、それぞれ自分たちをマイノリティとして意識するという現象が発生することになります。つまり、おのこのグループがそれぞれ一種の少数者意識、やや誇張していえば強迫観念 — 自分たちは、何か自分たちに敵対的な圧倒的な勢力に取り巻かれてるっていうような、被害者意識を、各グループとくに集団のリーダーがそれぞれ持っているということになるわけであります。

(後略)